

# 江戸時代の宿場「一ツ戸」

溝 淵 芳 正

江戸時代の下毛郡一ツ戸は宿場町で、山津屋、綿屋、大阪屋、蛭子屋等々の宿屋があり、明治の末年から大正の初めごろまで営業していた。

山津屋（井倉弘文氏方）に、明治二十年十月から同三十五年八月に至る間の宿帳が一冊残されている。それ以前の古い宿帳は、残念ながら明治十八年の火災で焼失したという。

この宿帳によって宿泊者数を調べてみると次表の通りである。

山津屋の宿泊者数（自明治二十一年至全三十四年）

年	月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	計
明治二一		二	一	二	二	四	一	七	六	六	二	二	四	六八
" 二二		五	五	三	一	一	八	四	三	八	九	三	二	八七
" 二三		九	二	六	三	六	六	一	七	八	九	二	九	九六
" 二四		四	三	五	三	六	三	三	八	一	六	一	三	七二
" 二五		八	九	一	八	一	五	一	六	四	六	四	七	一〇二

上の表を見ると、宿泊者は年に五十人から百人程度だったようである。但し宿帳に記入しなかった人もあろうから、実際は少し多かったかも知れない。

これは山津屋の場合であるが、他の宿屋もたいてい違いはあるまい。

宿泊客は多くはないが、宿屋といっても農業の傍らの副業であったから、別にどうということとはなかったであろう。

二六	／	三	五	四	三	二	三	四	／	二	八	九	五	三
二七	九	六	四	一	／	三	四	一	五	／	二	一	八	七
二八	三	一	七	六	七	四	五	六	七	／	／	四	五	〇
二九	八	六	四	一	〇	／	六	九	三	六	七	／	五	九
三〇	一	四	七	二	一	〇	五	七	／	五	四	四	六	五
三一	九	五	九	五	一	一	三	六	／	五	二	一	四	七
三二	八	三	一	五	／	九	七	一	六	七	一	〇	八	二
三三	一	二	三	五	二	四	一	四	五	／	七	一	七	一
三四	三	／	三	三	六	四	／	六	二	二	七	二	三	八

また易者や、地方回りの旅役者の一座に、祭文（浪曲）、浄瑠璃語り、人形つかい等の遊芸人その他もろもろで、中に「小鳥つかい」というのもあるがどんな芸をしていたのであろうか。

そして明治三十年代になると初めて軍人や学生が登場して来る。とくに学生の旅行者が多くなり、中学生（旧制）のグループや東京帝国大学理科大学生某の名も見え、時代の移り変りに興味をひかれる。それに面白いのは官吏の宿帳である。宿帳には氏名、年令、職業、族籍、住所、相貌の特徴、前夜の宿泊所、行先地、到着月日時刻、出発月日時刻等細かく記入するようになっていて、そんなことにはお構いなく、中央に墨黒々と大きく、例えば、「税務属某」「大分県看手某」「中津区裁判所執達吏某」というふうにだけ書いてある。それが一人の例外もなしにである。明治の官吏の意識が偲ばれるようである。

江戸の末期ごろ山津屋に田能村直入（一八一四—一九〇七）がしばらく滞在していたという。直入といえは有名な竹田の弟

旅人は、九州全域はもちろん、四国、中国、さらには近畿、北陸など、遠く関東、東北地方の人も宿泊している。その職業もさまざまで、最も多いのは行商人である。例えば魚・反物・綿・小間物・焼物・金物・葉・艾・仏具・農具・染粉・紅・白粉・針・ローソク・眼鏡・筆・墨・印肉等の文房具から三味線、それに珍らしい入歯の行商まで、ちよつと拾っただけでも、実に多種多様である。

これら行商人のほかには各種の仲買人や職人にそれに英彦山参りや耶馬溪見物の観光客が多く

子である。直入は、山津屋をねじろにして、あちこちと出歩いてたという。スケッチに出かけて行くのである。何日も宿をあげることもあり、帰って来ると二階の一室に籠って制作に余念がなかったという。

直入は山津屋を去るとき数枚の小品を残して行った。その中には風景画とともに数枚の春画があった。が、惜しいことこれらの画はすべて戦後手放したそうである。

ほかに有名人では頼山陽が一ツ戸に一泊している。文政元年（一八一八）十二月五日のことで、この日山陽は日田から山国谷を訪れたのである。

当時の山津屋は財政的に恵まれ、宿屋としても一ツ戸ではいちばん良く、客筋もよかったと言われているので山陽の宿泊はおそらく山津屋であつたらうと考えられる。

山陽は『耶馬溪図巻記』に次のように記している。

（前略）臘月五日豊前に入る。杜実村もりざねに至り、一水の北より来るに遇う、蓋し源を彦山に発する者なり。沿うて東すること数十里（この一里は六丁）、皆黒なれど左右の峰巒皆凡に非ざるを覚ゆ。山溪相迫る処、山腹を鑿ちて道となし、又、廂（窓）を穿ちて明を取れり、余炬（たいまつ）を買いて入る。廂に遇うて、窺えば月の溪水に在りて、朗然たるを見る。宮園村に至つて宿す。翌日大霧、余好山を失わんことを恐れ、霧の霽るを待つて乃ち発す。（原文は漢文、傍点は筆者）

右の文中に「山腹を鑿ちて道となし、又廂を穿ちて明を取れり」とあるのは一ツ戸隧道のことである。

この隧道は文化二年（一八〇五）に完成している。山陽の訪れる十三年前である。それ以前は日田から来るのに庄屋村から川沿いに妙ヶ野へ出て川を渡っていた、今の江洲井堰（当時の江洲井堰はまだ川下にあった）の上手に橋があった。

もっとも、橋とはいっても名ばかりで、蛇籠じやてという直径一メートル余の竹で編んだ円筒形のを、二個づつ並べて、四メートルおきぐらゐに据え、その中に大きな石を詰め込んで固定し、これを橋脚にし、その上に丸木を組んで渡し往来するのである。

享和二年（一八〇二）に、尾張の商人菱屋平七が耶馬溪を訪れたときの旅日記『筑紫紀行』の四月二十四日のくだりに次の記述がある。

村（宮園村）を過ぐれば川あり。十町ばかり行けば又川あり、二つとも石を積み上げて柱として、上に丸木をならべて、その上に石土を敷きて橋とせり。是を過ぐれば一ツ戸村に至る。人家二十軒ばかりあれど茶屋はなし。又川を二つ渡りて中摩村に至る。

菱屋平七は隧道の完成する三年前に訪れているから旧代官道を通っている。当時、宮園村から中摩村の間は川を渡らずに済むように新しい道の付替工事が行なわれていた筈だが、菱屋平七はそのことにはなにも触れていない。

記録によれば、一ツ戸の隧道は長さが四十三間（約七十八メートル）、高さは平均七尺九寸七分余（約二、四メートル）、敷は七尺四寸余（約二、二メートル）で、明り窓が七ヶ所あった、とある。

山陽は、もう日暮れていたなので、松明を買い求めて隧道の中に入り、眼下に流れる山国川の瀬音を聞きながら、明り窓からしばし月影を眺めて、旅情をなぐさめたようである。

村人はこの隧道のことを「岩穴」と呼んでいた。しかし当時の岩穴は再三の改修工事によって、今は僅かに一部を残すだけである。この残された岩穴には淵に臨んで明り窓がある。山陽がのぞいたという「淵」は、或はこれかも知れない。

山陽がこの日、広瀬淡窓とその門人たちに豆田の川原町まで見送られ、山国谷へと入ったことについて、面白い話が広瀬恒太氏著『日田御役所から日田県へ』の中に記されている。ついでに紹介しておこう。

山陽が広瀬淡窓のもとを辞してからしばらく経ったある日、淡窓の家の雪隠の汲取りをしていたところ、糞尿とともに一冊の本を汲み上げた。よく水で洗って見ると、「詩韻含英」という本で、それには頼久太郎と墨黒々々書かれていた。山陽が落した本だったのである。

そのいきさつはこうである。

山陽と淡窓が詩の競作をしていたところ、山陽は決められた時間内に平仄がどうしても合わず、困った山陽は、ひそかに用便にこと寄せて雪隠に行き、「詩韻含英」を取り出して同韻の文字をさがしていた。ところがどうしたはずみか、過ってその本を使所の中へ取り落してしまった。山陽は拾うにも拾えず、と言って、このことを打ち明けるわけにもいかず、さすればこれ以上永居をして、詩の競作をしたくないというので、それまでは、

酒良し、客良し、景色よし、 三つ良ければ、此の年は 日田で越したし、迎えたし おらが四十の初春を  
 と言っていたのを、急に旅仕度をし、倉皇として日田を立去った、というのである。

一ツ戸で一泊した山陽は、翌六日、「霧の霽るるを待って」宿をたち、この日は鶴居村古城の正行寺に旧知の末広雲華上人を訪ねた。

耶馬溪の風光に魅せられた山陽は、雲華上人とともに再び耶馬溪を探賞し、このとき槌山路の浄真寺に善慶上人を訪ねて一泊している。

因みに、山陽がこのときの旅で詠じた「耶馬溪山天下無」の一句は、「耶馬溪図巻記」とともに、奇勝耶馬溪を天下に紹介するきっかけとなったのである。「耶馬溪」という名称も、山陽がこのとき始めて用いたのであった。

さてまた、「日田永山布政史料」に、「文化元甲子三月、奉幣使御用四日市日記」というのがある。宇佐神宮奉幣使参向の御用奉仕に当たったときの日記である。日田代官所支配の天領からは庄屋らが残らず御用を仰せつかっている。

この日記を見ると、文化元年（一八〇四）四月九日、御用を終えた日田の一行が四日市からの帰途、一ツ戸に一泊したことを記している。行きがけは口ノ林（耶馬溪町）の山口屋に一泊している。口ノ林もまた宿場だったのである。

今もそうであるが、江戸時代の一ツ戸は、屋並が道の両側に軒に列ねており、道巾も当時としては他より一般と広く、宿場としてのたたずまいをなしていた。「筑紫紀行」には「茶屋はなし」とあるが、江戸期を通じて酒屋はあった。宿場故の需要があったからであらう。

（下毛郡耶馬溪町文化財調査委員・耶馬溪町宮園）